

はじめに

黒いレザーのジャケットに、黒いズボン、黒い野球帽と全身黒づくめのいでたち。煙草をふかし、丸みを帯びた声と訥々とした語り口。おかしくも哀しい、その作品たち。

二〇二三（令和五）年二月十八日午前、私は豊橋に向かう東海道新幹線の車内でその人物のことを考え続けていた。映画監督、岡本喜八。

代表作『日本のいちばん長い日』をはじめ、戦争に材を取った作品を多く撮り続けた名監督であり、敬意をこめて「鬼才」と評されることが多い。東京から一時間二十分、これは、ささやかだが、痛烈だった岡本喜八の戦争体験の原点を求める、小さな旅だった。

新幹線の座席に身を沈め、車窓を流れる景色を横目に、私は三十八年前の一九八五（昭和六十）年一月十六日に放送されたドキュメンタリー番組『NHK教養セミナー「昭和の20歳」』（2）——生と死の間で「昭和20年」——の映像を脳裏に浮かべていた。放送当時、六十歳の喜八は、細身の身体からだにトレードマークとなった黒づくめのいでたちで、豊橋陸軍予備士官学校だつた場所を訪ねていた。

一九二四（大正十三）年二月十七日生まれの岡本喜八は、太平洋戦争最末期の一九四五（昭和二十）年一月、二十歳の時、特別甲種幹部候補生として、千葉県松戸市にあった陸軍工兵学校に入学した。二十一歳になった喜八は、四月二十九日、松戸から愛知県豊橋市にあった豊橋陸軍予備士官学校へと移駐し、本土決戦に備えていた。しかし、その日はついに訪れず、終戦を迎えた。

新幹線を降り、豊橋駅南口に隣接する新豊橋駅から豊橋鉄道渥美線あつみに乗り換える。ここからは五分ほどで愛知大学前駅に到着する。駅名の通り、目の前には愛知大学がある。

愛知大学の敷地内に立てられた案内板によると、明治時代に設置された陸軍第一五師団は一九二五年に廃止されたが、一九二七年に下士官候補者を教育する陸軍教導学校となり、一九三九年には、甲種幹部候補生を養成するため、陸軍予備士官学校が置かれた。戦後の一九四六年、中国・上海シャンハイにあった東亜同文書院の関係者が創設した愛知大学がその跡地に入った。跡地といっても、当時はまだ陸軍予備士官学校時代の建物がほとんどそのまま残されており、その敷地は、田原街道（国道二五九号線）をはさんで、県内有数の名門校として知られる愛知県立時習館じじゅうくわん高校までと、広大だった。松戸から豊橋に移駐してきた喜八たちの部隊は、現在の時習館高校の敷地に入った。

私が訪れた日は、土曜日ということもあってか、愛知大学も時習館高校も、人影はまばらだ

った。四十年近く前、この場所を訪れた喜八は、番組のスタッフから促されたのだろう、「豊橋予備士官学校の本部があったところです」と話しはじめ、さらに四十年前の出来事へと視聴者を誘って行った。敷地内を歩きながら、「僕は器材庫の点検をやっていた。ちょうどその最中に、器材庫から三〇メートル先、たぶんあのあたりになると思うんだけど」と言うと、目の前を大まかに指さす。そして、「爆弾が落ちた。それでほとんどが亡くなった」と訥々と語る。さらに、「この辺、全然様子が変わってますから、ちょっと分かんないけど、たぶんこの辺に落っこちたのではなからうかという気がします」と言いながら、じっと敷地内を見わたした。

場面は変わり、神奈川県川崎市にある個人事務所、喜八プロダクション（以下、喜八プロ）の室内で、椅子に腰掛け、煙草をふかす喜八の姿をカメラは捉えていた。煙草を手にしたまま、喜八は豊橋での回想の続きを話し出した。

「ざーっという落下音が聞こえてきた。空襲警報も警戒警報もなかった。たぶんB29がエンジンか何かを止めて入ってきて、一発だけ僕らの三〇メートル先に落っことした。これはもう一瞬のうちに地獄図絵といえますかね。悲惨なものです。ほとんど、何人生きていたかな、たぶん候補生は三人くらい、ボクを含めてと思いますけどね」

丸みを帯びた声で、喜八は仲間が負傷した凄惨な様子を再現していく。このときは、命拾い

したが、死は間近に迫っていた。

「僕は苦しいときとか、たとえば、要するにしよっちゅう死みたいなものを考えるわけでしょ。結局、自分の寿命みたいなのをね。あの決めちゃったんですよ。うまくいって二十三歳、下手すりゃ二十一歳っていうふうに分で決めちゃったんですよ」

喜八の話は続く。

「自分の寿命を二十一、二十三で頭打ちにしちゃう。寿命、自分の人生ってそれしかないんだと」

一つひとつの言葉を選んでいるような話しぶりだ。そして、自身を映すカメラを見すえ、こう言い切った。

「本当の何か、青春じゃないような気がしますけど」

この番組には、喜八以外にも二人の出演者がいた。一九二五（大正十四）年生まれの女性史研究家、もろさわようこと、喜八と同じ一九二四（大正十三）年生まれの教育者、丸木政臣まさよしみだ。丸木は熊本師範学校を繰り上げ卒業し、熊本予備士官学校に入学。鹿児島で沖繩米軍の上陸作戦に備えて準備中に終戦を迎えた。戦後は教育者の道を歩み、和光学園の校長を務めるなどした。

制作側から番組タイトルである「昭和の20歳」に沿った質問が出されたのだろう。丸木がこう語る。

「二十歳はたちと言えば燃えさかるような青春の時期でしょ。青春の時期が大変暗くてね。希望をまったく閉ざされていたということが、今思い出されますね。毎日毎日、ほんとに明日つていうことを考える暇いそばのないようなね、それが私の二十歳だったと思います」

そして、言葉を紡ぐ。

「私たちは生きていたけどもね、生きていくことは、千にひとつも希望がない。したがって、自分の与えられた宿命、運命のために死んでいくんだという感じだったのではないでしょうか」

一九四五年八月十五日の終戦時、十代後半から二十代前半だった大正十年代生まれの若者たちは、戦地となった南の島で、その周辺の海域で、または中国大陸で、果ては極寒のシベリアでその命を落とした。戦争末期には米軍が日本各地を爆撃したので、日本国内にいることさえ、命を保証しなかった。死ぬのだ、と自分の運命を見定めていた彼らは、突然訪れた終戦に戸惑いながらも、日本社会が復興から発展へと急激に歩みを早めた時代、その端緒から原動力となり、長く社会を牽引けんいんした。それが「戦中派」という世代だった。彼らの心中には、戦中の軍隊

や軍学校で虐げられた日々への怒りや恨み、さらに、生き残ったことへの喜び、時にそれ以上の強い感情として、戦死した仲間への後ろめたさがあった。

私が喜八プロの事務所内で、喜八の次女で女優の岡本真実まみさん（一九六二／昭和三十七年生）と一緒に膨大な資料を整理していた時のことだ。作業をしながら、喜八との思い出を問わず語りに話してくれる真実さん。しばらく熱っぽくしゃべると、「私が話しかけると仕事できないよね」と言って語るのをやめ、そのうち「喜八は」いつも同じことばかり書いているでしょ」と、笑みを浮かべた。

確かに、喜八は豊橋陸軍予備士官学校時代、目の前で仲間が亡くなった時のことを、自著をはじめとするエッセイの中で、くり返し書いた。さらに、復員して戻って来ると、近所の友人の多くが亡くなっていたことも、くり返し語った。それは、たとえばこんなふうだ。

復員して、まず、愕然がくぜんとしたのは、町内の、いわゆる餓鬼友達たちが、一人も帰って来なかったことである。
（『鈍行列車キハ60』）

先述のドキュメンタリー番組でも、やはり、その「餓鬼友達」について話が及んだ。

「僕が復員して帰ってきたときには、町内の餓鬼友達なんてのは一人も帰ってなかったし、僕

の商業学校のクラス五〇人のうち二五人、半分は死んでました」

米軍の爆撃で仲間を喪うしないながらも、実戦の一步手前で終戦となり、命を拾った喜八ほど、この世代の一員であることに自覚的であり、「戦中派」の心情をそこかしこにこめた作品を撮り続けた映画監督はいない。喜八が生涯を通じてこだわり抜いた「戦中派」とは一体何なのか。

戦中派という名称自体、戦争が遠くなるにつれて、馴染なじみが薄くなっている。名称はさておき、かつてその人たちは、私たちの周りにたくさんいたはずなのだ。私は一九八一（昭和五十
六）年生まれだが、父方母方、双方とも祖父は一九二五（大正十四）年生まれだった。母方の祖父は、海軍飛行予科練習生となり、仲間が特攻隊員として飛び立っていく中、その時を自らも待ちつつ、現在の山形県東根市ひがしねにあった神町海軍航空隊で終戦を迎えた。

この祖父は、私が小学三年生の時に亡くなったので、戦争体験について、祖父から直接聞いたことはない。祖父の枕元にあった、戦友の顔写真を付した名簿だけが、祖父から直接感じた戦争の記憶だった。何の意図で、祖父がその名簿をそばに置いていたかは分からないが、幼かった私には、白黒の陰影を帯びた写真に写る人たちの表情が、妙に恐ろしかったことだけは覚えてる。戦後、電気工事の会社を興し、相応の成功を収めた後も、いや、その後だったからこそ、亡くなった戦友のことが忘れがたかったのではないか。自らの生死を分けた現実、目

を背けることはできなかつたのかも知れない。戦争について調べ、体験者の多くから話を聞いた今なら、その気持ちを想像することはできる。祖父の中にも、おそらく岡本喜八や先述の丸木政臣と同じような心情があつたのだ。

私が、岡本喜八の中に、戦中派の心情を見、そのことを掘り下げたくなつたのは、この祖父の存在が大きかつたと思う。

大まかに言うと、私と年齢の近い三十代、四十代であれば、戦中派は祖父の世代に当たる。五十代、六十代であれば父親が戦中派となる。もう亡くなられた方も多いたろうが、記憶の中で、懐かしい面影を残すあの人も、戦中派であつた。そのことを想像するだけで、彼らが戦争を通して何を見て、何を感じ、そして、どういう思いを持って戦後を生き抜いたのか、あるいは、戦後社会とどう対峙し、何を受け入れ、何を拒絶したのか、そのことに関心を持たずにはいられないのではないか。

その答えは、岡本喜八、そして彼の残した作品の中にきつとある。